

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381135

研究課題名(和文) 学生の学習成果に基づいたピアプログラムの開発研究

研究課題名(英文) Development for Student Learning-Outcome Based Peer Programs

研究代表者

安部 有紀子(小貫) (Abe, Yukiko)

大阪大学・全学教育推進機構・准教授

研究者番号：30553416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は学修成果に基づいた大学教育におけるピアプログラムのあり方を明らかにするものである。ピアプログラムは過去20年において急速に発展してきた取組であり、その原型は米国高等教育に見ることができる。いくつかの事例から得たことは、米国においては学生支援やピアプログラムのアセスメントは学習成果だけでなく、プログラムや活動全体を含んでおり、また活動の中期的な戦略計画の重要性であった。転じて日本の学生支援にとっては、学習成果アセスメントは大学の教育戦略や目標、また他の教育活動やプログラムといった全体的な教育の質を向上させるための方策と密接に関連づけられていなければならない。

研究成果の概要(英文)：This research explores the model of peer programs based on student learning outcomes in higher education. Peer programs are gaining popularity on college campuses one the past 20 years. According to cases of U.S. Peer programs, The following results were obtained. The first, their target of an assessment is not only student learning outcomes, covering whole of programs or activities. The second, it is becoming development mid-term strategic plan in recent years. These describe student affairs need accountable to stakeholders for the role and meaning of their activities in education. The one of the important implication for future learning outcomes assessment in Japanese student affairs/services is learning outcome assessment must relate each other with institutional strategies and goals, and the other educational activities and programs to improve an educational quality as a whole.

研究分野：高等教育

キーワード：学生支援 ピアプログラム ピアサポート 高等教育 日米比較 学習成果 アセスメント

1. 研究開始当初の背景

世界的な大学教育の質保証の潮流の中で、学生の学習成果に対する関心が高まり、ディプロマポリシーの明示や、学習到達度の測定などの様々な取組が実践されている。中央教育審議会の「学士課程教育の構築に向けて」（2008年答申）では、認知的・情意的側面の学習成果を「学士力」として提唱し、それに対応した学生の主体的参加を促すグループワークやディスカッション等の授業法や、Eポートフォリオ、サービスマーケティング等の学習を促進する方策の導入も進んでいる。

このように学生の成長を促す仕組みは多岐にわたっているが、その1つとして、近年注目を集めているのが、正課教育外の学生支援の領域における学習促進の方策である。特に学生支援においては、2000年以降、新入生サポーター（オリエンテーション・初年次教育）を始め、チューター（授業外の学習相談）、メンター（学生相談）等、教室内外の様々な領域において、訓練を受けた学生が他の学生を支援する「ピアプログラム」の拡大が著しい。

Astin（1993）によれば、学生の情意面の発達にとって、ピア（学生同士）による相互関係は大きな影響を及ぼしており、ピアプログラムを通じて学生同士が繋がることで、帰属意識や学習意欲を高める上で大きな効果をもたらす。また、ピアプログラムの支援活動の実践を通じて、学生は時間管理や相互コミュニケーション等のスキル面だけでなく、学内の教育制度やサービスの資源の活用能力や、所属大学の教育目標における学生像を体現したロールモデルとして自ら行動することで、大学の教育目標への貢献意識を高めて行くことも明らかとなっている（Keup 2012）。

しかしこのように様々な学習成果が期待されるピアプログラムであるが、そもそもの学生支援の領域においては我が国においては未だ研究蓄積も少なく、プログラムを通じた学習成果の指標や効果測定をめぐる課題も多い。我が国に先んじて学生支援のアセスメントが普及してきた米国では、CAS（高等教育規準向上評議会）によって、多様な学生支援プログラムの教育目標やプログラム内容等のガイドラインが制定されており、プログラムを通じて達成していく学習成果指標やその分析方法の詳細な情報を公表することで、学生支援プログラムの質向上に大いに寄与してきた。例えば、学習の達成度を判断する基準を示す評価法のルーブリックは、これまで難しいとされてきた情意面の可視化に有効とされ、米国のピアプログラムにおいても、CASの学習成果指標を用いた自己評価ツールとして、大いに活用されている。

その中で、近年、ピアプログラムの実践においても、学習成果アセスメントの考え方が徐々に浸透するようになり、プログラムに参加する学生の自己評価や、専門職からの他者評価等を通じて、学習成果の向上が図られている。

2. 研究の目的

以上の背景の下、本研究では、日本の大学教育における学生の学習成果の向上を目指し、学生による学習成果の自己評価を組み込んだ学生支援プログラムおよびピアプログラムのあり方を探索することを目的とする。しかしながら、米国で開発された学習成果指標や自己評価ルーツを、独自の文脈を持つ日本の大学教育へとそのまま適用することは難しい。そこで、本研究ではまず、米国にて学生支援プログラムおよびピアプログラムの事例を収集し、その課題を明らかにした上で、日本型学習成果の自己評価ツールを試行していく。それを踏まえ、学生の学習成果向上を促進するために、アセスメントを組み込んだ学生支援プログラムやピアプログラムのモデル開発を目指す。また、これらの研究を通じて、ピアプログラムに関わる学生スタッフの役割や位置づけや、実際の学生支援プログラムやピアプログラムに学習成果分析やアセスメント活動を導入することの意義についても明らかにしていく。

3. 研究の方法

本研究では最初に、米国のピアプログラムにおける学生支援アセスメントの動向を明らかにするために、学習成果ツールの活用事例、および国内の学習成果分析の運用事例や先行研究を収集し、比較分析をもとに有用性を検証する。

特に、学生支援は分野が多岐にわたることから、それぞれの領域における学習成果およびアセスメントを探求する米国の事例を収集し、機関ごとの大学文化の差異や、学生支援プログラムの領域の特性や条件を明らかにし、我が国の学生支援へアセスメント活動への普及のための課題等を明らかにする。

これらの成果を踏まえ、日本に適した学習成果指標を踏まえたアセスメントのあり方を考案し、実践現場でプログラムに携わる教職員、学生とともにその内容の有効性について検討していく。

4. 研究成果

4-1. 米国学生支援におけるアセスメントの実態

米国高等教育における学生支援においては、学習者中心主義への転換の具体的な方策として、1990年代頃からアセスメントを取り入れてきたが、特に2000年代に入り、学習成果を基盤としたアセスメントへとその内容が大きく変化している。通常、学生支援のアセスメントは、その対象を機関内の「学生支援活動全体」「ユニット（部課やセンター等）の活動」「特定のプログラムやサービスの活動」に分けることができる（安部 2016）。もともと学生支援には多様なプログラムやサービスが存在し、基盤となる学問背景も異なることが多い。そのため、プログラムの全米基準や、学習成果の設定は、それぞれの領域

の専門職団体が設定し、機関内のアセスメントの基準（成果やターゲット）として取り入れられていく。そしてプログラムやサービスの実践を経て効果測定が行われ、改善が図られていく。このような一連の活動は、「アセスメントサイクル」として示すことができる。

前述の通り、アセスメントの目的はプログラムや活動の強みや弱みを実践者自身が把握し、改善に活かしていくことであるため、設定以降のサイクルには、全て実践者自身が関わることが前提となっている。効果測定において成果が上がらなかった、もしくは見出すことができなかつた場合は、その改善策としてプログラム運営や体制を見直すだけでなく、設定されているそもそもの基準を見直すことも推奨されている。

4-2. 日米のピアプログラムの実態

日本の高等教育において、ピアプログラムは過去 10 年間で急速に拡大してきた新たな取り組みの一つである。日本学生支援機構の 2013 年度調査によれば、大学 43.6%、短期大学 17.3%、高等専門学校 57.3%がピアプログラムを実施している¹⁾。その 7 割近くが過去 10 年間で初めてピアプログラムを導入した機関であり、取組の拡大傾向の一方で、プログラム運営や組織形成に関する知見の蓄積が十分ではなく、その制度や中見については未だ検討が不足している（小貫, 2011）。

一方で、米国高等教育においてピアプログラムの概念の発祥は古く、その創設期に遡るといわれている。寮生活を基盤とした公私にわたる学生と教員の関わりの中で、学寮内では学生同士のコミュニティが形成され、様々な活動が行われていた。例えば授業外の学習相談として、教員によるチュータリングのほか、学生同士のチュータリングも日常的に行われていた。その後 1900 年代初頭頃には学寮アシスタントやホールカウンセラーといった学寮内のピア活動の制度化が進み、1950 年代には学生の内面的な支援を行う初めてのピアメンターが登場した。このように、元は自然発祥的に展開されてきたピア活動が、大学の発展とともに、徐々に組織化が進んでいき、1970 年代以降になると、アルコール、ドラッグ、ハラスメント等の健康教育を担うピアエドゥケーターや、学習支援を担うピアチューターやピアカウンセラー等、様々な領域においても拡大していった。

米国高等教育において、最も多様かつ数多くのピアプログラムが展開されているのは、その発祥でもある学生寮である。その中心にあるのが学寮アシスタント（RAs: resident assistants）であり、通常は 2 年次生以上の上級生（場合によっては同級生）が寮の中で共に生活をしながら、フロアごと、もしくはいくつかのルーム単位で他の学生の生活面での支援を行う。学寮に関わる学生担当職の全米専門職団体である ACUHO-I（Association of College and University

Housing Officers - International）では、学寮アシスタントの訓練方法やプログラム運営について学ぶ専門職のためのオンラインコース（有料）もあり、学寮プログラムにおいて学寮アシスタントの運営が重要な課題として位置付けていることが窺える。ほとんどの学寮アシスタントは寮費の免除や奨励金等を含めて何らかの資金援助を大学アシスタント以外にも、有償無償を問わず複数のピアプログラム機会が提供されている。

一方で、1990 年代以降、急速に拡大している領域のピアプログラムは、学習相談のチューターやアシスタント、補講の講師、アカデミックアドバイザー（修学助言）等である。ピアプログラムの拡大の背景には、母体組織となる学習支援センターの設置が進んだことが大きい。大学によってはこの他にもライティングアシスタント等、領域を特化した支援を行うこともある。また、これらの学習支援におけるピアプログラムの学生スタッフは、場合によっては正課の授業に支援者として参加することもあり、教員との連携も比較的多く行われるため、学生支援と正課教育をまたぐ独自の発展を遂げてきている。

以上のようなピアプログラムに参加する学生スタッフは「ピアリーダー（peer leader）」と呼称されることもあるが、米国大学では他にも自主的な学生団体や学生組織が存在しており、ピアリーダーは、これらの学生活動に関わる学生と合わせて「学生リーダー（student leader）」と総称されている。また、大学によっては、キャンパスコミュニティの活性化を目的に、ピアプログラム学生組織等で活動する学生リーダーのために、準備したリーダーシップ開発のための訓練プログラムや、単位を付与する授業科目の受講を義務づけている場合もある。

しかしながら、本研究で明らかになったことは、米国学生支援においてはピアプログラムは学生支援プログラムの領域別に発展してきた経緯があり、それぞれの領域内において学生スタッフに対する訓練方法やプログラムモデル等の開発は進んでいる一方で、領域を超えた包括的なピアプログラムの議論は進んでいないという実態であった。

4-3. 米国におけるアセスメントの実態

まず、ピアプログラムにおける学習成果ベースのアセスメントに必要な「学習成果の規定」については、総じてリーダーシップや対人関係、コミュニケーションスキル、関連する知識、自尊心、健全な行動等の、学生支援全体が追求しようとする学生の学習成果の代表的な要素が含まれるとされている。米国学生支援では、ピアプログラムに参加する学生スタッフは、支援を行うための訓練を受けるとともに、会計や役割分担、資料作成、ミーティング等、プログラム運営にも参加し、他者への支援経験を重ねることを通じて、自

らを振り返り、様々な側面から学習成果を向上させていく。これらの活動を通じた多様な学習のための経験は「リーダーシップ機会 (leadership opportunities)」と捉えられ、ピアプログラムの学習成果においても、その対象は主に学生スタッフに焦点が当てられ、議論が進められている。

領域別には、学寮サービスの学寮アシスタントと健康サービスのピアエデュケーターの具体的な例を見てみたい。まず、学寮サービスの領域では、専門職団体である ACUHO-I がプログラムの全米基準作成の中心的な役割を果たした経緯により、学寮アシスタントの学習成果についても、2000 年代後半から徐々に現場レベルの学生担当職を中心に議論が広がっている (Diesner, 2014)。現在、各大学で学寮サービスの学習成果を設定する際の参照先として、ACUHO-I が推奨しているのは、「CAS 学習・発達成果」である。「CAS 学習・発達成果」では、学生支援のプログラムおよびサービスにおいて促進する学生の学習および発達の要素として、知力成長、効果的コミュニケーション、高い自尊心、現実的な自己評価、明確な価値観、キャリア選択、リーダーシップ開発、健全な行動、有意義な相互関係、自立性、協調、社会的責任、満足いく、充実した生活スタイル、多様性の認識、精神的気づき、個人的・教育的目標、といった 16 の要素が定義されている (CAS 2009)。学寮サービスを担当する学生担当職は、「CAS 学習・発達成果」等を参考にしながら、自大学の文化や教育目標を踏まえて学寮サービス全体、および学寮アシスタントの学習成果を 5~7 程度の要素に絞って設定していることが多い。

オハイオ州立大学コロンバス校 (以下 OSU) では、大規模州立大学という大学の特性を生かして学寮により多くの学生を収容するとともに、それを運営する豊富なスタッフを有している。中でも学寮に関するアセスメントを実施するための一定の専門性を備えたスタッフを関係組織に配置している。学生支援全体の目的や戦略のもとに各部門が具体的な目標やそれを達成するための主要な取組を定義したうえで、各種データを集め、検証を進めていく。各部署でのプロセスには、アセスメントの専門家の支援が入っており、学寮独自のアンケート調査やフォーカスグループインタビュー等も実施している。これらのアセスメント活動には学寮アシスタントとして雇用される学生スタッフも対象として含まれているが、それはどちらかという他被雇用者としての責任を果たすための目標管理型の研修にやり方が近い。

4-4. 日本への応用と示唆

我が国においては、学士課程答申で着目された「質保証」に代表されるように、制度改革から教育内容や方法へと教育改革の重点が移りつつある。ここで問われる「質」とは、

教育内容や方法自体の良し悪しのみならず、学生の学習に対する成果、すなわち「学生が何をできるようになったのか」であり、その観点でのアセスメントは国際的にみても主流となっている。この流れは正課教育に留まらず、学生支援にも及ぶであろうことは容易に想像が付く。

ピアプログラムを含め、学生支援におけるアセスメントを展開していくためには、第 1 にアセスメントを実施するために一定の専門性を備えたスタッフを関係組織に配置すること、またそれらの専門性を有するスタッフと、また米国の事例では、実践者同士の対話はもちろん、実践者とアセスメントの専門家との対話も重視している点も注目すべき要素である。

第 2 に、アセスメントの領域が、学生の学習成果に留まらず、プログラム全体、ないし、組織の活動全体にわたっているということである。第 3 に、最近の動向として、組織のあり方に関する中期的な見通しに基づく戦略計画が策定されているという点である。これらの点からは、学生支援に関する組織が、大学の他組織との関係において、もしくは、学生支援領域内部の組織間で、経営上、教育上の説明責任を強く求められつつあることが看取できる。執行部への根拠ある説明・説得を行うことにより、学生支援に関わる財源や携わるスタッフ等の人的資源の確保にもつながっている。以上のように、アセスメント活動はプログラムや取組の質の向上という内発的動機だけでなく、資源縮小の中でのプログラムの生き残りという外発的動機も大きく普及要因として働いているということである。また、個々の組織による取り組みを押し進めるのみならず、「大学としての」戦略や目標、活動やプログラム間の相互関連性を高める視点を持つことは、日本においても大きな課題といえるだろう。

転じて日本の学生支援において今後アセスメント活動が普及することが期待される領域を取り上げてみると、どの領域でもその可能性はあるが、特にカウンセリングやキャリア支援や健康サービス、留学生支援等、専門職団体や基盤となる理論構築が進んでいる領域においては、アセスメントを主導する人材の確保が比較的しやすく、実際に一部の領域ではプログラム基準の設定等も団体において進められている。

一方でピアプログラムに特化してみると、米国と同様に安定的に学生スタッフの人材の規模を確保しやすい学寮サービス、また学習支援等の領域において、アセスメントを取り入れていく可能性はある。本研究では、最終年度に学寮プログラムに焦点をあて、日米の事例の比較や日本へのアセスメントの導入について十分検討を重ねてきた。

その結果、日本における学生寮には「学習促進」の要素が近年急速に広がりつつある実態があること、また学寮アシスタントの育成、

研修は米国を模倣するだけでなく、各大学文化の特徴を踏まえて形成されていることが明らかとなった。ただ、アセスメントについては、プログラムアセスメントの指標として学生満足度以上のデータ収集がされることはまれであり、プログラムの壁を乗り越えて大学全体の学生調査やその他データを学寮プログラムと共有していることもまれであり、学寮アシスタントのアセスメントに踏み込む事例も見られなかった。

以上の日本の事例の分析を踏まえた今後の研究の方向性としては、アセスメントを普及していくためには、現場スタッフの意識啓発や大学を超えたプログラムの標準化を話し合う機会が我が国には決定的に不足しており、この土壌がない中でアセスメントのモデル開発は限界があったと言わざるを得ない。実践者だけでなく執行部も『アセスメントステップ』や『アセスメントサイクル』を学習成果を基盤としていかに展開していくのか」といった学生支援戦略について、より強く関心を持つべきであり、プログラムの目的を明確に捉えた上で、アセスメントを設計・実施・分析し、改善に向けて支援スタッフと協働できるような人材を「新たに登用するのか、学内で育成するのか」「学生支援組織とどのようにコミットさせていくのか」といった点も含め、今後の学生支援のあり方を検討していくことが急務である。

(参考文献)

安部(小貫)有紀子(2016)「米国高等教育におけるピアプログラムの現状とアセスメントの意義」『大学論集』,48巻,2016,129-144.
Astin, W. A. (1993) *What matters in college?*, CA: Jossey-Bass.
Council for the Advancement of Standards in Higher Education. (2009) *CAS Professional Standards for Higher Education* (7th ed.). Washington D.C.: Council for the Advancement of Standards in Higher Education.
Diesner, M. R. (2014). *Developing Learning outcomes for Resident Assistant Training*. Ed.D. Thesis, Newark: the University of Delaware.
Keup, J. R. ed. (2012) *Peer Leadership in Higher Education*, New Directions for Higher Education, No.157, Jossey-Bass.
小貫有紀子(2011)「ピア・サポートの現状と課題—ピア・サポートの拡大と多様化—」『学生支援の現代的展開—平成22年度学生支援取組状況調査より—』大学等における学生支援取組状況調査研究プロジェクトチーム報告書,日本学生支援機構,63-77頁。

5. 主な発表論文等

(研究代表者,研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10件)

安部(小貫)有紀子「米国高等教育におけるピアプログラムの現状とアセスメントの意義」『大学論集』査読有,48巻,2016,129-144.
安部(小貫)有紀子,川嶋太津夫,山口和也,南岡宏樹,妹尾順子「米国における大学教育の質保証と教育改革の動向」『大学高等教育研究』査読有,4巻,2015年,35-42.
橋場論「学生支援を担当する職員に求められる能力とその開発」『大学職員論叢』,査読無,4巻,2016年,41-47.
北澤泰子,望月由起「学生寮お茶大 SCC における活動実践と成果」『高等教育と学生支援』査読無,5巻,2015年,40-47.
霜鳥美和,望月由起「お茶の水女子大学キャリア教育におけるコンピテンシー評価プログラムの実践報告」『高等教育と学生支援』査読無,5巻,2015,63-75.
北澤泰子,望月由起,霜鳥美和「学生寮におけるピアサポーターの成長に関する一考察」『高等教育と学生支援』査読無,5巻,2015年,85-94.
安部有紀子,橋場論,望月由起「学生支援における学習成果を基盤としたアセスメントの実態と課題」『高等教育研究』査読無,20巻,2017年,印刷中.
安部有紀子「課外活動,学生表彰,ピア・サポート,ボランティア活動」『大学教育の継続的変動と学生支援』日本学生支援機構,2017年,55-74.
橋場論「学生支援に関する組織の現状と課題」『大学教育の継続的変動と学生支援』日本学生支援機構,2017年,15-24.
望月由起「大学等におけるキャリア教育・就職支援の現状と課題」『大学教育の継続的変動と学生支援』日本学生支援機構,2017年,15-24.

[学会発表](計 3件)

望月由起,北澤泰子「学生寮『お茶大 SCC』における活動実践と成果」大学教育学会,2014年5月31日-6月1日,名古屋大学.
望月由起,北澤泰子,霜鳥美和「学生寮におけるピアサポーターの成長に関する一考察」第21回大学教育研究フォーラム,2015年3月13日-14日,京都大学.
安部有紀子,望月由起,橋場論「ピアプログラムの現状と課題」第22回大学教育研究フォーラム,2016年3月18日,京都大学.

[図書](計 2件)

安部有紀子「教師を支える」森朋子,溝上慎一編著『アクティブラーニング型授業としての反転授業理論編』2017年,93-114.
望月由起「高等教育機関におけるキャリア教育実践」小泉冷三,古川雅文,西山久子編著『キーワードキャリア教育』2017年,印刷中.

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安部（小貫）有紀子（Yukiko Abe）

大阪大学・全学教育推進機構・准教授

研究者番号：30553416

(2) 研究分担者

望月由起（Yuki Mochizuki）

昭和女子大学・総合教育センター・准教授

研究者番号：50377115

橋場論（Ron Hashiba）

福岡大学・教育開発支援機構・講師

研究者番号：50549516

(3) 連携研究者

小島佐恵子（Saeko Kojima）

玉川大学・教育学部・准教授

研究者番号：40434196

秦喜美恵（Kimie Shin）

立命館アジア太平洋大学・教育開発・学修

支援センター・教授

研究者番号：90162784

平井達也（Tatsuya Hirai）

立命館アジア太平洋大学・教育開発・学修

支援センター・准教授

研究者番号：80389238

(4) 研究協力者

なし